

・データで見る東幡豆の漁業と採石業・

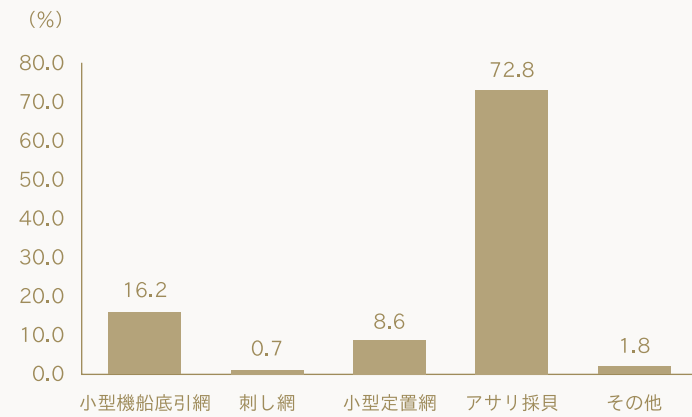


図1 東幡豆における漁業生産量の漁業種類別割合（2015年）

出処：『東幡豆漁協業務報告書（H27）』より作成。

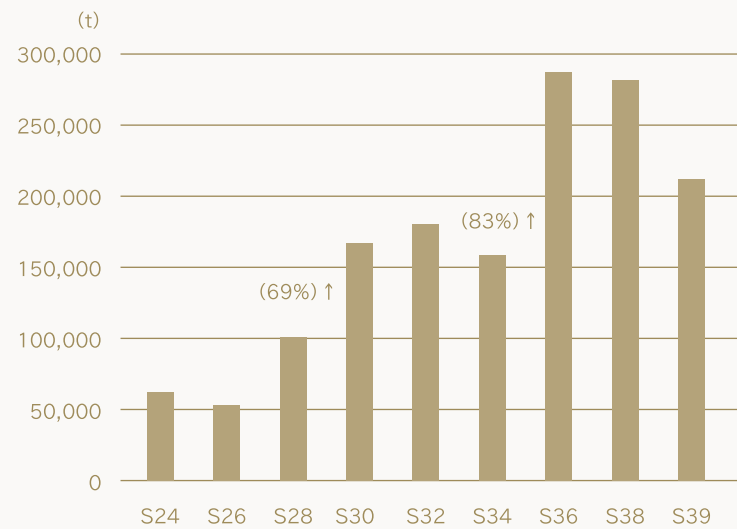


図2 東幡豆港における石材積出量の推移

出処：『幡豆町史本文編3—近代・現代』より作成。

## 2. 繁栄を育む海

観光業という名のもう一つの産業、  
半世紀弱にわたって富を育んできた  
東幡豆の海の昔と今を紀行する。



**昔** *Past* 【昭和 39 年（1964）頃・三ヶ根山から眺める海の様子】<sup>がまごおり</sup> 蒲郡市、<sup>こうだ</sup> 幸田町、西尾市の境界にある標高 326m の<sup>さんかねさん</sup>三ヶ根山。昭和 33 年（1958）に、三ヶ根山を含む三河湾一帯が国定公園に指定され、翌年の昭和 34 年には年間 50 万人の観光客数を記録。また、昭和 43 年（1968）には全長 11.8km、幅 5.5m に及ぶスカイラインが開通している。海的全貌が前に広がる三ヶ根山は、写真撮影スポットとして人気を誇っていたことがうかがえる。

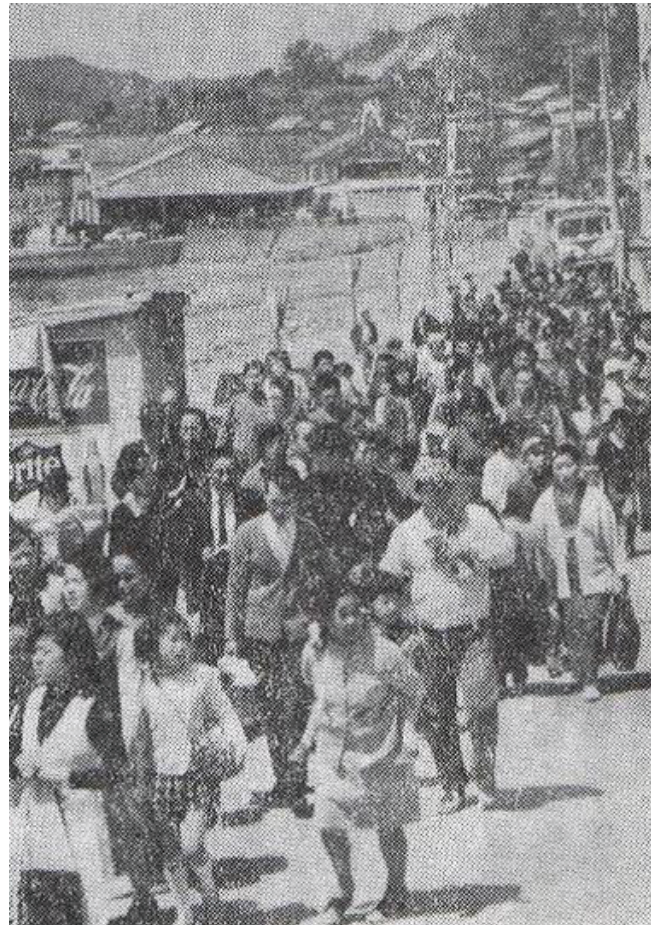


**今** *Present* 【2016 年・グリーンホテル三ヶ根から眺める海の様子】毎年 6 月から 7 月初旬にかけて 7 万本ほどのあじさいが咲くことから「あじさいロード」、「あじさいライン」とも呼ばれる三ヶ根山スカイライン。あじさい祭りをはじめ、今では紅葉、イルミネーション、夜景等を楽しむ場として知られており、2015 年には 133,461 人の観光客が三ヶ根山スカイラインを訪れている。島々（沖島・左、前島・右）を包み込む海の景色は依然として美しい。



山頂に児童遊園地や回転展望台があり、山頂までのロープウェイが整備されていた。





## 昔

Past

【昭和 47 年（1972）・うさぎ島、猿が島へ向かう観光客の様子】可愛い動物と一緒に遊べる島というコンセプトで、昭和 32 年（1957）に開島されたうさぎ島と猿が島。通称は前者が前島、後者が沖島。昭和 60 年（1985）のゴールデンウィーク期間中に、両島を訪れた観光客は 17,000 人ほどにのぼると記録されている。



## 今

Present

【2013 年・前島へ向かう大学実習生の様子】今では一味違う姿を見せるこの道。写真は、2013 年より、毎年 8 月終わりから 9 月はじめの 3 日間において実施される大学の实習で、前島に向かう東海大学海洋学部の学生たちの様子。この頃になると、彼らに笑顔で声をかけてくれる地元住民もよく見られる。



## 昔

Past

【年代不詳・うさぎ島春まつりの様子】昭和 32 年（1957）に開島されて以来、定期的に行われていた「うさぎ島春まつり」。写真は第 10 回目となる時の渡り船乗り場（海岸側）の様子で、昭和 40～50 年代だと思われる。紅白色で鮮やかに彩られた乗り場の後方に広がるのは、綺麗な青色の海。うさぎ島にやってきた春を感じさせてくれる。





**昔**  
Past

【昭和30年（1955）頃・うさぎ島渡船乗り場の様子】  
渡船を利用してうさぎ島に渡る人々でにぎわう渡船乗り場。当時、東幡豆には名古屋鉄道の運営以外に、個人経営の渡船もあった。



**今**  
Present

【2015年・前島船乗り場の様子】今では船乗り場へ向かう道や棧橋が整備されており、漁船だけではなく、環境教育のプログラムとして実施されるミニクルーズや大学の実習等で用いる船により活用されている。



**昔**  
Past

【昭和40年（1965）頃・名鉄観光船の様子\*】  
名古屋鉄道が運営する観光船が昭和32年（1957）から運航され、39年の間に1,000万人以上の観光客を東幡豆港とうさぎ島・猿が島間で運んでいた。その後、高速道路の整備やマイカーブーム等による観光客の減少を背景に、平成9年（1997）で廃止となった。右の写真は平成9年の観光船の様子。



【昭和40年（1965）頃・名鉄観光船事務所の様子】観光船のチケット販売とともに、売店や休憩スペースがあり、学校帰りの学生たちの憩いの場であった。





左から、昭和39年(1964)・監視台\*、昭和39年・飛び込み台、昭和44年(1969)・海水浴場を清掃する幡豆ボーイスカウトの様子。昭和42年(1967)に幡豆ボーイスカウトが、健康で明るく規律ある人間育成を目的として発足されている。

昔  
Past

【昭和39年(1964)頃・東幡豆海水浴場の様子\*】海水浴場として大賑わいの東浜海岸。東幡豆海岸が海水浴場として広く知られるようになるのは、昭和2年(1927)に「新愛知」(中日新聞の前身の一つ)が選奨する県下10名所に入選してからである。その後、昭和24年(1949)に幡豆郡10名所にトップとして選定されたことや、翌年の昭和25年に幡豆観光協会が設立されたこと、県立公園の一環へ編入されたことなどを通して飛躍的な伸びを見せる。とくに、昭和24年からの3年間は「うなぎ上り三カ年」と呼ばれた。



2013年・体験地引網の様子。

今  
Present

【2016年・海水浴場であった海岸で遊ぶ子どもたちの様子】今では海水浴場としてではなく、東幡豆駅から徒歩3分という好立地から、観光客が気軽に遊べて癒しを求める場となり、体験地引網等のイベントの場ともなっている。





# 昔

【昭和31年(1956)頃・民宿鈴喜館の様子】東幡豆の繁栄期を支えた民宿、鈴喜館。昭和8年(1933)に、鈴喜館ご主人の祖父である鈴木喜八氏が別荘として建てており、自らの名前をとって鈴喜館と名付けたという。その後、戦時青年男子の鍛錬場としての海洋道場や、海水浴客向けの季節旅館等を経て、民宿にいたる。昭和25年(1950)の営業開始から今年(2017)で67年目を迎える歴史ある民宿。写真は、左から鈴喜館ご主人の母方の祖父、祖母、叔母。



昔の写真と同じ角度から撮影したもので、撮影依頼に快諾してくれたご主人(左)と奥さん(右)。

# 今

【2016年・民宿鈴喜館の様子】80数年の月日が流れた今でもその気品は変わらない大きな屋敷。収容人数の大きさから今では様々な団体客が宿泊しており、近年は東海大学海洋学部の実習時の定宿となっている。



# 昔

【昭和31年(1956)頃・岡田屋の様子】東幡豆の繁栄期を支えたもう一つの民宿、岡田屋。昭和54年(1979)から営業しており、今年(2017)で38年目を迎える。岡田屋の前でバイクに乗っているのはご主人の亡き父。



岡田屋近くで撮影された子どもたちの様子。



宿だけではなく、モーニングとランチをやっているのが岡田屋の特徴。

# 今

【2016年・岡田屋の様子】森川の近くにある今の岡田屋。昔の建物は台風により流されてしまったためこの場所に移ったという。岡田屋のご主人は父の代から幡豆石の海運業を営んでおり、お店を切り盛りしているのは、奥さん、娘さんと住み込みの板さん。







**昔**  
Past

【昭和 28 年（1953）頃・桑畑山から眺める町】海に寄り添い、自然の恩恵をたっぷり享受してきた東幡豆の町並み。海岸には、江戸時代に植えられたと言われる防風林が広がる。

海側から眺める東幡豆の町並み（2016 年）。



**今**  
Present

【2016 年・とうてい山古墳への中途から眺める町】♪ ソレ幡豆は良いとこ、幡豆はサツテ // よいところ、山と海との夢の町、ソレサよよい夢の町…。幡豆音頭の一節が思い浮かぶ。



名古屋鉄道（通称：名鉄）による海水浴客の誘致が始まった昭和24年（1949）から、うさぎ島・猿が島観光船が休止となった平成9年（1997）までの半世紀弱にわたって、町に富を育ててきた東幡豆の観光業は、大きく海水浴、うさぎ島・猿が島、三ヶ根山、の3つに分けてみる事ができる。

●海水浴<sup>15</sup>

東幡豆の海水浴場の場所は、東幡豆漁協から森川までの東浜と呼ばれる海岸であり、かつては妙善寺の表浜であった。この海水浴場は昭和2年（1927）に、県下10名所に入選してから広く知られるようになり、昭和24年からは本格的な伸びを見せるようになった。p.36表1は、昭和24年から昭和28年（1953）における海水浴客の状況を見たものである。とくに著しかったこの時期の海水浴客の増加ぶりは、「うなぎ上り」とも言われていた。

詳しく覗いてみると、昭和24年7月の16,429人、同年8月の26,702人から、昭和26年（1951）の7月には

一日で15,000人、同年8月にも一日で20,000人もの海水浴客が押し寄せている。また、昭和28年7月にも一日で10,000人もの海水浴客を記録している。さらに特筆すべきことは、各種記事に使用された当時の状況を描写するワードである。上述の「うなぎ上り」に加え、「驚異的数字」、「芋を洗う混雑」、「最高記録」、「最高の大混雑」、「うれしい悲鳴」等々が使われており、当時の海水浴の賑やかぶりを如実に物語っている。

その後、愛知こどもの国の開園（昭和47年）や他の海水浴場の整備（寺部海水浴場・昭和55年）などによる観光地の分散化、高速道路の整備やマイカーブームなどによる幡豆町全体の観光客の減少を背景に、海水浴場として使われなくなり、今では海岸散策や体験漁業等の場となっている。

●うさぎ島・猿が島<sup>11</sup><sup>12</sup><sup>13</sup><sup>14</sup>

うさぎ島・猿が島においては、昭和25年（1950）から昭和26年（1951）にかけて、電灯の設置や植樹、道路整備、道

路中間に架橋など、観光開発を目的とした一連の整備が行われるとともに、うさぎや猿などの可愛い動物が放し飼いされ、昭和32年（1957）に開島されるようになった。両島が開島された昭和32年は、東幡豆港、うさぎ島・猿が島、西浦温泉を結ぶ名鉄観光船が運航されるようになった年でもある。

その後も、昭和45年（1970）に公衆便所の設置などインフラの整備が続けられた。昭和52年（1977）には開島20周年の記念イベントとして、「写生大会」や「さくら茶会」など一連の魅力的な行事が大々的に行われている。昭和60年（1985）には、クジラの頭にうさぎと猿の模型がのっているクジラ型遊覧船が就航されるようになり、大きな注目を浴びた。そして、昭和63年（1988）には、約700m離れたうさぎ島と猿が島の間で、世界初の海上綱引大会が行われ、さらなる盛り上がりを見せた（p.36表2）。今では、呼び名が前島と沖島に戻り、前島のみが潮干狩りや環境学習、実習などで人々が訪れる場所に

なっている。

●三ヶ根山<sup>10</sup>

一方、三ヶ根山においては、昭和27年（1952）から総合開発計画が定められるとともに、着々と観光開発が進められた。町政が施行されて30周年となる昭和33年（1958）には、三ヶ根山を含む三河湾一帯が国定公園に指定され、「喜び多い昭和33年度」が大きく記事のヘッドラインを飾った。そして、2年後の昭和35年（1960）には、国民宿舎のホテル三ヶ根荘が建設され、昭和38年（1963）には国際施設と呼ばれる有料休憩所、子供遊園地、回転展望台などが次々と完成している。

その後、昭和43年（1968）にスカイラインの開通、昭和44年（1969）に長さ2002mの遊歩道や無料駐車場の整備、昭和60年（1985）にあじさいラインの整備などが順次行われ、三河湾の観光スポットとして定着したのである。今でも三ヶ根山からの眺望は素晴らしく、毎年一定規模の観光客が訪れている。（李 銀姫）

旅日記  
Vol.2

ランチのあとは  
散策タイム。  
旅はまだこれから！

岡田屋でランチ

新鮮な海の幸を使ったボリューム満点のランチをいただきました。お造りも煮魚も最高に美味しい。地元の人たちの憩いの場でもあり、モーニングも名物です。



みんなでしばしの歓談



座敷からは海が臨めます

路地裏歩き

昔ながらの漁村は狭い路地が入り組んでいます。歩いているだけでちょっとした探検気分です。



船の絵のマンホール



海辺をお散歩

船溜りには漁船が停泊していました。海辺の神社の境内には小さな児童公園もあります。

